

P3-419 当院における前置癒着胎盤症例の検討

東海大

松本 直, 友野真理, 宇田優貴, 石井博樹, 後藤優美子, 金 成実, 西島義博, 近藤朱音, 石本人士, 和泉俊一郎, 三上幹男

【目的】生殖年齢の高齢化や帝王切開率の上昇により前置胎盤などの胎盤付着部位異常症例の発症頻度は増加傾向にある。特に前置癒着胎盤症例では帝王切開術に引き続き子宮全摘術が必要となり、出血量の増加が問題となることが多い。当院では以前より産科出血のコントロールに子宮動脈塞栓術(UAE)を施行しているが、特に最近では前置癒着胎盤症例に対して術中UAEを施行し出血量の減少を図っている。今回我々は当院における前置癒着胎盤症例を検討した。【方法】1999年1月から2009年9月までに周産期管理を行なった前置癒着胎盤症例9例について、母体年齢、既往歴、出血量、輸血量の各項目について検討した。また2008年7月以降、当院では同症例に対し術前に尿管および内腸骨動脈へのカテーテル挿入を行ない、子宮底部横切開法により児を娩出させた後、UAEと子宮全摘術を施行している。そこで、術中UAEの有用性についての検討も行った。【成績】前置癒着胎盤症例9例における母体平均年齢は 33.0 ± 4.5 歳(平均 $\pm$ SD)であり、7例に帝王切開術の既往を認めた。平均出血量は 3278.5 ± 1671.9 mlであり、8例に自己血もしくは保存血輸血を要した。術中UAEは2例に施行したが、術中出血量は1374mlと3730mlであり2症例とも自己血輸血のみで対応可能であった。一方、UAE非施行例7例の術中出血量は 3486.1 ± 1743.0 mlであり、平均輸血量は 1600 ± 1222.0 mlであった。【結論】今後さらなる検討が必要であるが、前置癒着胎盤症例においては術中UAEの施行により術中出血量および輸血量を減少できる可能性が示唆された。

P3-420 比重と蛋白/クレアチニン比を用いた妊婦蛋白尿スクリーニング

神戸大

牧原夏子, 山崎峰夫, 森田宏紀, 森實真由美, 小原範之, 森本規之, 天野真理子, 山田秀人

【目的】妊婦健診で使用する随時尿の試験紙法半定量蛋白尿スクリーニングは偽陽性の頻度が高い。そこで、比重・蛋白/クレアチニン比を測定することによって蛋白尿診断の精度向上を試みた。【方法】正常血圧妊婦の健診時の随時尿：早期妊婦(妊娠20~31週)260検体と後期妊婦(妊娠32週~)323検体の計583検体を対象とした。試験紙法尿蛋白半定量を実施し、比重、蛋白(P)、クレアチニン(C)を測定した。それらを比重により低比重(L)群：1.010以下、中比重(M)群：1.011~1.020、高比重(H)群：1.021以上に分類し、検討を加えた。【成績】1)検体数は、L群168、M群220、H群195であった。2)1年のうち7月か8月に採取した検体はそれ以外の時期に採取した検体に比べ尿比重($M \pm SD$)は高く(1.019 ± 0.009 , $n=95$ vs 1.016 ± 0.008 , $n=488$, $p<0.005$)、H群の比率が高かった(44.2% vs 31.4% , $p<0.05$)。3)C濃度は、L群 32.8 ± 17.4 , M群 96.6 ± 40.2 , L群 169.5 ± 69.8 (mg/dl)で、群間に有意差を認め($p<0.001$)、全体でC濃度と尿比重は $r=0.7615$, $p<0.05$ の正相関を示した。4)PC比はL群： 0.081 ± 0.118 , M群： 0.084 ± 0.203 , H群： 0.087 ± 0.221 で、群間の差はなかった。5)試験紙法半定量の正診率を調べる目的で、半定量結果 $\pm$, $+$ 以上、の症例において、蛋白尿診断のISSHP推奨PC比(0.265)を超えた頻度は各群でそれぞれ以下の通りであった。L群20%, 50%; M群0%, 15.6%; H群1.3%, 2.2%であり、尿比重が高いほど、試験紙法は偽陽性率が高いことが明らかとなった。【結論】PC比に加えて、比重を測定することで、蛋白尿診断の精度が向上すると考えられた。

P3-421 尿蛋白/クレアチニン比を用いた妊娠中の尿蛋白量評価に関する検討

筑波大

小倉 剛, 野口里枝, 八木洋也, 中村佳子, 小島真奈, 藤木 豊, 濱田洋実, 吉川裕之

【目的】近年、内科領域においては外来管理時の尿蛋白量評価法として、随時尿の尿蛋白/クレアチニン比(P/C比)がその有用性から頻用されている。妊娠高血圧症候群ガイドライン2009においてもP/C比を用いた管理の将来性が指摘されている。しかし、本邦では妊娠女性における有用性の検討がほとんどなされておらず、同ガイドラインでも今後の検討の必要性が強調されている。本研究の目的は、妊娠時の尿蛋白量評価法としてのP/C比の有用性を明らかにすることである。【方法】当院で妊娠管理を行った女性のうちインフォームドコンセントが得られた37名(妊娠25週~40週)について、随時尿蛋白定量、随時尿半定量的P/C比測定(アトラス試薬カートリッジPRO)および1日尿蛋白定量を施行し、随時尿蛋白定量およびP/C比の各々と1日尿蛋白量の相関を検討した。ついで、P/C比($300\text{mg/g} \cdot \text{Cre}$ 以上を陽性とした)を病的尿蛋白(0.3g/day 以上)のスクリーニングとして用いた場合の有用性を解析した。【成績】対象女性の1日尿蛋白量は $0.01 \sim 2.92$ (平均 0.69) g/dayであった。随時尿蛋白定量と1日尿蛋白量の決定係数(R^2)は0.31、P/C比と1日尿蛋白量の R^2 は0.74であり、P/C比の方がより強く1日尿蛋白量と相関した。P/C比を病的尿蛋白のスクリーニングとして用いた場合、感度=0.89、特異度=0.39、偽陽性率=0.61、偽陰性率=0.11、陽性尤度比=1.46、陰性尤度比=0.27であった。【結論】P/C比は、随時尿蛋白定量より強く1日尿蛋白量と相関する。P/C比を病的尿蛋白のスクリーニングとして用いた場合、陽性であるから必ずしも病的尿蛋白であるとはいえないものの、陰性であれば病的尿蛋白を除外できる可能性がある。